

九、イエスの幻——諸国民への課題（答を変える）

マタイによる福音書第二十五章三一—四六節

私たちはみな世界がより良い場所になることを望んでいる。ただ世界がどのくらいひどいとか、どんな解決法が適切であるとかについては一致しないかも知れないが、私たちは、多くの人々が苛酷な扱いを受けており、しかもそれが必ずしも彼らの過ちによるのではないこと、そして現状が変えられなければならないことについては知っているのである。

個々の多くのキリスト者は現状を変えようと努力してきている。アルバート・シュヴァイツァーはアフリカで医者となるためにヨーロッパでの哲学者および音楽家としての輝かしい経歴を捨てた。マザー・テレサは修道会に入り、カルカッタの困窮している人々や死につつまる人々の間で働いている。このような生き方は、病氣の人や飢えている人や裸の人が必要としていて

に対する個人的応答を示している。それは私たちがあとで学ぶように、イエスが高い評価を与えている憐れみのわざである。

しかしながら第三世界のキリスト者によって私たちに突きつけられている問いは、巨大な社会的病弊に対する個人的関わりがいかに賞賛すべきものであったとしても、果してそれで十分であるのかどうかということである。彼らは私たちがこれから学ぼうとしているテキストに基づいて、それでは十分でないと私たちに告げている。

聖書のテキスト マタイによる福音書第二十五章三一—四六節

人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、羊を右に、やぎを左におくであろう。そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病氣のときに見舞い、

獄にいたときに尋ねてくれたからである』。そのとき、正しい者たちは答えて言うであらう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。すると、王は答えて言うであらう、『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。それから、左にいる人々にも言うであらう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいつてしまえ。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである』。そのとき、彼らもまた答えて言うであらう、『主よ、いつ、あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気であり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでしたか』。そのとき、彼は答えて言うであらう、『あなたがたによく言っておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである』。そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであらう』。

私たちはすでに、イエスが自分に對して向けられた質問を變更した話については検討した。本章においてはイエスの幻について検討するが、その幻の中でイエスは私たちが慣れてしまつていて、当り前に思つてゐる答を變更する。

イエスは最後の審判について自分の理解を語つてゐるが、キリスト教の中には、キリスト教の使信全体を一つのぞつとさせる鮮烈な画像に圧縮してしまつてゐる一派がある。すなわちほとんどの人（通常、「イエス・キリストを個人的な主および救主として受け入れ」ていないとされる人々、あるいは、口では受け入れていると言つていても、本當には受け入れていないとされる人々）は永遠に地獄に落とされ、少数の人（通常、自分は正統と自認している人々）だけが救われるといふのである。良い生活を営もうとする動機は恐れだけにしか基ついていない。

このような筋書きを自信満々で述べるキリスト者が、自分たちは聖書的だと主張するのは奇妙なことである。なぜならば聖書は彼らが重視している主題に對してほとんど行間を割いていないからである。本章のテキストは、ホセ・ミランダが指摘しているように、「最後の審判について新約聖書が記している唯一の詳細な描写」である（Miranda, *Marx and the Bible*, p. 19）。その「詳細な描写」が、彼らの月並みな最後の審判の筋書きとは全く似つかないものであることは

さらにもっと奇妙である。

それゆえに、私たちはこの記事に押し付けられてきた神学的覆いを取り去って、新しく聞きなおそうとする必要がある。この記事は先見の明のある記者が推定可能な未来の出来事のブループリントとして事前に示してくれているものではない。それはしばしば「たとえ」と呼ばれてはいくけれども、実際にはたとえではない。たとえば何か身近なこと——銀貨をなくした女性とか、家出した少年とか、盗賊の一味になった男とか——から始めて、それを何か身近ではないこと、例えば決してひとりで来るものではない神の国の性格、などを指し示すために用いられるのである。このテキストにおいては、せいぜいのところ、逆転したかたちのたとえがあるに過ぎない。なぜならば、身近ではないこと（御使の登場、宇宙的審判）から身近なこと（獄にいる人を尋ねること、飢えている人を食べさすこと）へとたとえが展開し、そのつなぎとして羊とやぎの話が置かれていくからである。

それゆえにテキストを幻すなわち大キャンバスに描かれた絵と考えると、言語学的に（言葉で）伝達できないことを絵画的に（画像で）伝達しようとしていると考える方がもっと有益であろう。マタイは福音書の結末に向けて絵画的描写をほどこしている。イエスはすでにエルサレムに到着しており、予想されていた対決（そのことは前章で指摘した）が宗教的および政治的権力との

間で展開していた。権力者たちはイエスを——永遠に——葬り去ってしまうことを望んでいた。つい二、三日前にもイエスは神とカイザルの両方に従うことの矛盾で彼らと論争し、パリサイ人を厳しく批判し（「偽善者よ……へびよ、まむしの子らよ」）、エルサレムの運命を案じて嘆き、近づきつつある「終り」のしるしについて語り、弟子たちには予測できないその到来の時を謙虚さをもって予言し、そして一連のたとえを語られたのである。イエスの余命はいくばくもなく、彼はそのことを知っていた。それゆえに彼が語りそしてなすことはすべて緊急性を帯びていた。最後の審判の幻が語られたのはこの文脈においてである。

人の子（イエスご自身に対する称号）が裁きの場を開こうとしている。彼の前に立っている人々は、羊飼が野原から集めてきた羊とやぎを分けるように、二組に分けられる。分け方は厳しい価値判断に基づいてなされ、「羊」は賞賛され、「やぎ」は非難される。

羊——正しい者——たちは、人々が必要としていた助けをしたので、天国に入るであろうと告げられる。

あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、
かわいていたときに飲ませ、

旅人であつたときに宿を貸し、

裸であつたときに着せ、

病気のときに見舞い、

獄にいたときに尋ねてくれたからである。

(マタイ二五・三五—三六。三七—三九、四二—四三、四四参照)

これは素晴らしい知らせであるが、羊たちは得意になる代わりに戸惑いを示している。これは何かの間違いがあつたからに違いない。イエスのためにそのようなことをなしたという功績を認められたいけれども、それは実際ありえないことである。そこで彼らは「いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか……」と尋ねる。マタイは同じ表現を二度繰り返し返している。イエスは答えて言う、「あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」と。

これは嬉しくなるような愉快な結末、ハッピーエンドの物語であり、強烈な色彩の明るい画像となつていて、羊たちがなした良き知らせを表している。

しかし物語には反対の面があり、画像には暗い雰囲気も漂っている。そこにはやぎもいるのであるが、彼らは良い報いを受けない。文体的また内容的に、テキストの後半部分は前半の反対の姿を映し出している。やぎたちは人々が必要としていた助けをしなかつたので天国に入ることにはならないというのである。「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませ」てくれなかつたからである……と三度目も同じ表現がなされている。

やぎたちも戸惑いを示すが、戸惑いだけが羊たちと共通している唯一のことである。これは何かの間違いがあつたからに違いない。自分たちはいつイエスが空腹であるのを見て食べさせず、裸であるのを見て着せませんでしたか……と四度目も同じ表現が繰り返されている。彼らは返事が否定形であつたことを除けば、羊たちが受け取つた返事と同じ返事を受け取っている。「あなたがたによく言っておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかつたのは、すなわち、わたしにしなかつたのである」(マタイ二五・四五)。

幻には決定的な二筋の結論があるが、一番最後にある恵みの希望の調べ、すなわち、「正しくない者は」永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう」(マタイ二五・四六)と、いうことを除けば、暗い雰囲気が続いている。

考察と議論のための課題

初めに、私たち自身の文化におけるキリスト者がこの記事の中に見出してきたいくつかの洞察を振り返ってみよう。

1 幻は、私たちには責任が与えられており、私たちがなす行為には結果が伴うということを思い出させる。私たちは、「心配することはない。十分なことをしていなくても、神様は許して下さるし、キリストはすでにあなた方の罪のあがないをして下さっている」といった神学の中に逃避することはできない。ディートリッヒ・ボンヘッフアーはそのような見解を正しくも「安価な恵み」と呼んでいる。

2 神の前で重要なことは私たちが頭で考えたことではない。大切なことは、(a) 規則正しい教会出席でも、(b) 毎日祈ることでも、(c) 使徒信条を知っていることでも、(d) 献金することでも、(e) イエス・キリストを主であり救主として告白することすらもない。このよ

うなキリスト教的生活の特徴は替むべきことであるかも知れないが、イエスの評価による合格基準には程遠いものである。イエスの評価において最も重要なことは、困っている人を助けたかどうかである。一回読んだだけではそのことがはっきりしない場合のために、簡単なリストも掲げられていて、困っている人を助けるとはどんなことであるかについて具体例が示されている。そのリストは（少々の違いはあるが）、誤解がなかなか消えてゆかない場合のために、四回も繰り返されている。

3 私たちは神の民に仕えることを通して、神を愛する。私たちが貧しい人々を支援する時、私たちは彼らを支援しているだけではなく、神に栄光を帰している。私たちが貧しい人々を拒否する時、私たちは彼らを拒否しているだけではなく、神をも拒否している。イエスが第二の戒め（隣人を愛すること）は第一の戒め（神を愛すること）と同じものであることに触れられた時、まさにこの点を指摘している。パウロはさらにもっと単刀直入に語っている——「律法の全体は、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』というこの一句に尽きるからである」（ガラテヤ五・一四）。

4 「正しい」人たちは自分の正しさを主張しない。彼らは、貧しい人々に食べさせたことによつて自分たちが神を愛していたことを知つて驚いている。彼らは、「いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見ましたか」と審判者に尋ねている。（正しくない人たちも気を許して腹を立てながら答えている。「いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て、食べさせませんでしたか。とんでもないことです」。）

恵みはここにおいて働いている。救いは、「私たちは神様のために今日こんなことをした。昨日はあんなことをした。週末にはさらに何点も稼げる」と言いながら）善行を積み重ねた人たちのためにあるのではない。救いは、隣人に対する関心が同時に神に対する関心であることを全く知らずに、見返りを期待しないで、隣人への関心を示したことに對する賜物である。「正しい」人たちが驚いたのは当然である。義人を主張する人たちは、まさに救いを拒否される人たちのことである。

5 貧しい人々や見捨てられた人々に注意を向ける審判者は、彼らの中に生きておられる。審判者は、抽象的な神でも、無関心な神でも、まして恐ろしい神でもない。むしろ審判者はキリスト御自身であり、その生涯を自ら進んで貧しい人々や見捨てられた人々と共にされた方であり、

神への愛と貧しい人々への愛が不可分であることを私たちに示してくれる最も確かなしるしとなっている。

以上のようなことはすべて良いことだし結構なことだと、第三世界の友人たちは言うかも知れない。しかしその他にも付け加えることがある。彼らは少なくとも三つの点を私たちに對して強調する。

1 私たちが通常「正しい」とか「正しくない」(これはあまり社会的影響力のない言葉である)と翻訳している言葉は、しばしば第三世界のキリスト者によって「公正な」とか「不公正な」(これは極めて社会的影響力のある言葉である)と翻訳されている。ホセ・ミランダは、公正(justice)の一つの重要な側面には、盗まれていたものを返還するということが含まれていると指摘する。空腹の人々を食べさせ、裸の人々に着せることは慈悲深い施しではなく、単なる公正を行なうことである。本来貧しい人々の物であったり彼らから不正に奪われている物を彼らに返還することなのである。それゆえにイエスの幻は、税控除を受けられる寄付を訴えているのではなく、公正を求める叫びであり、不正に流れていたことを正す熱き叫びなのである。エルネス

ト・カルデナルはソレンチナーメのミサにおいてそのことを指摘しているが、言わんとしていることは極めて明瞭である。

(イエスは) 救われる人々のことを「公正な人々」と呼んでいる。聖書の中で、「不公正な」人々とは、孤児ややもめから奪う者、貧困を生み出した責任のある者、他者を犠牲にして豊かになっている者、土地を取り上げる者、詐欺を働く者、残忍で流血をもたらす者のことであり、短く言えば、抑圧者のことである。「公正な」人々とはその正反対の人々のことである。

(*The Gospel in Solentiname*, Vol. 4, p. 59)

2 グスタボ・グティエレスは論点を強調して、イエスの使信が、あたかも個人から個人に対する慈悲の行為についてのものであるかのように見なす「個人的慈しみ (charity) の落し穴に嵌まることを避けなければならない」と主張する (*A Theology of Liberation*, p. 202)。私たちが「隣人」について語る時、私たちは単に個人についてではなく、社会的諸関係の全体についても語っているものであり、搾取されている社会階級、支配を受けている人々、被抑圧共同体についても

語っている。我―汝以外の関係があるのである。

ソレンチナーメの信者の一人アレフアンドロは、「キリストに関することは単に伝統的な慈しみの行為として理解されているけれど、それだけのことを意味してはいないと思う」と苦悩を述べている。時には「伝統的慈しみ」しか実行可能でない場合があるかも知れないが、キリスト者は「社会的慈しみ、すなわち不正がもはや存在しなくなる全体的体制」についても考え始めなければならぬのである (Cardenal, p. 51)。ソレンチナーメの信者たちは、「社会的慈しみ」が神の国の始まりであることについて一致した見方をしている。

困窮している個々人に施しをすることは、不正の原因に挑戦してゆかない応答の仕方である。その点をグティエレスは明瞭に描き出している (G. 202)。

慈しみとは、今日、「政治的慈しみ」である。……食物や飲物を与えることは現代において政治的行動となる。それは、他者の労働の代価を着服する一握りの人を利する構造と化している社会の変革を意味している。この変革は社会の根底すなわち生産手段の私的所有の根本的変革を志向すべきである。

北アメリカの人間は、「生産手段の私的所有」という言葉に体がすくんでしまうかも知れないが（私自身その言葉を省略してしまいたい気持ちに駆られた）、引用文の論点を非難することは難しい。一九八〇年以来、私たちは、社会奉仕事業を「公共機関」から切り離してそれらを個人およびボランティア団体の責任にすることが、かつてないほどに貧しい人々を個人的慈善に依存させることになってしまっていることを見てきている。慈しみは、不公正な社会構造に挑戦し、すべての人に利益をもたらすような構造に転換することを含む、とグティエレスは主張する。

3 グティエレスは明らかに、イエスの幻は、個人的責任すなわち「自分は病人を尋ねただろうか」「自分は家の前にいる空腹の人に食物をあげただろうか」「自分は獄にいる人を支援する働きに参加しただろうか」といったことを自己点検する提案をしているのだという暗黙の前提に挑戦している。第三世界のキリスト者は、私たちが聖書のテキストにもう一度目を向けて、「誰が人の子の前に集められて別々に分けられようとしているのか」を自問してみようかと問う。私たちは通常、「問われているのは個人的生活に問題がある人たちだ」と答えるが、それは全く間違っている。イエスは答を変えている。テキストをよく見ると、「すべての国民をその前に集めて、彼らをより分け」るであろう（マタイ二五・三二）と書かれている。イエスの幻は個人的責

任に関することではなく、共同の責任に関することである。裁きにかけられているのは「国民」である。

これは新しい基準と新しい採点法による全く新しい裁き方である。もし私たちが第三世界の友人たちのことを真剣に受けとめようとするのであれば、この新しい観点からイエスの幻を再検討しなければならない。その試みをしてみよう。

● 私たちの国は、空腹の人を食べさせ、かわいている人に飲ませているであろうか。私たちは、自分たちの姉妹たちや兄弟たちの中の「最も小さい者」の健康のために財源を供することを、国家的課題として見ているであろうか。その典型的な例としては（これ以外にも多くの例を挙げることができよう）、「女性、幼児、児童のためのプログラム」の予算を上げることができる。このプログラムは貧しい働く母親たちの幼い子供たちのためにミルクやオレンジ・ジュースやビタミン剤を提供しているのであるが、その予算が、新規に数億ドルが軍備のために予算化されたのと同じくして、ほとんど存在しないほどに削減された。高性能の兵器システムのためには予算を増大し、基本的な食料供給制度のためには予算を削減せよ、というのである。恐るべき真実は、核兵器はたとえそれが使用されなくても、人を殺すことである。なぜならば、そのための予算が

違つた用い方をされたとすれば、貧困と飢餓を緩和することができるからである。

イエスの幻は、貧しい人と空腹の人について国家主義的な定義づけをしてはいない。イエスの姉妹たちや兄弟たちの中の「最も小さい者」には、ハーレムやアラチアの人々だけでなく、カルカタやコンセプションの人々も含まれている。すべての国の人々を食べさせることは私たちの国の課題ではないけれども、すべての人に十分な食料を供給する構造をつくる手助けをすることは、すべての国にとっての課題である。今日私たちの国においては、そのような関心は政府の優先事項の中で他のどの関心よりも低いものとなっている。一九八四年、私たちの政府は飢えた子供たちが満ちている世界の中で、合衆国の農家がミルクを生産しないようにするために何百万ドルも支払っている。

これでは空腹の人を食べさせ、かわいている人を飲ませていることになるであろうか。

● 私たちの国は、旅人に宿を貸しているであろうか。第七章で挙げた例には説明が必要である。エルサルバドルにおいては、合衆国に支援された軍事独裁政権が相次ぎ、反対する市民たちを——過去四年間で四万人以上も——組織的に殺害してきている。そのような状況の中で、自分たちの首が危ないことを知っているサルバドル人たちが、「政治亡命者」として保護を求めて合衆

国に入つてしようとすることは無理もないことであるし、法的にもそのような権利があることを国連も保証している。

しかし移民局は（国務省の支援を得て）日常的に彼らを検挙し、エルサルバドルに送還し、虐殺される危険性に立ち向かわせようとしている。このような政策に関して公表された理由は、亡命サルバドル人は実際には「政治亡命者」ではなく、もっと良い暮らしをしたいだけの理由で合衆国に来ているのだ、というものである。非公表の理由は、合衆国はエルサルバドル政府を支持しているがゆえに、サルバドル人に対して——最も例外的な場合を除いて——政治亡命を認めてしまうと、合衆国が残酷な政権を支援しているのを認めてしまうことになるというものである。そして非公表の結論は、たとえごまかしに基づいたものであったとしても、政治的体面の方がサルバドル人の生命よりも重要だということである。それゆえに難民たちを送還しなければならないのである。

これでは、旅人に宿を貸していることになるであらうか。

● 私たちの国は、裸の人に着せているであらうか。今日裸の人に着せることは、金持の古着を貧しい人々に配給できるような倉庫を建てる以上のことを意味している。それはすべての人、特

に「最も小さい者」でさえもが、生活の必要最低限——衣食住と（特に）仕事——を獲得し、自分で服を買えるだけの尊厳を持って生活できるようにすることを意味している。

しかしながら一九八〇年以降、私たちの国の政策は貧しい人々を支援するプログラムを縮小し、個人やボランティア・グループや教会が慈善事業に関わるべきであって、「国」全体としては責任がないということ——聖書のテキストとは正反対に——主張してきている。

これでは、裸の人に着せていることになるであらうか。

● 私たちの国は、病気の人を見舞っているであらうか。今日病気の人を見舞うことは、個人的に病院訪問をしてベッドの横で祈ることが治療上良いことであるとしても、そのようなことを意味してはいない。それは、国が、裕福な人だけが利用できる特権としてではなく、すべての人が利用できる権利として、病人のための十分な施設を作ってゆく責任をとることを意味している。ソレンチナーメの漁民の一人であるギレルモは核心をついたことを言っている。「キリストは病人を見舞うことについて語っておられるが、当時はそれしかできなかったんだ。今だったら、診療所や無償医療や公衆衛生や予防薬についての話をされただろう」(Cardenal, *The Gospel in Solentiname*, Vol. 4, p. 52)。

しかし、合衆国における健康管理計画は國民の一部分にしか利用できるものではなく、上昇する医療費は貧しい人々から必要とされている医療をますます奪い取っている。その一方で、政府は健康管理計画への関与を縮小しなければならぬと主張し続けている。

これでは、病氣の人を見舞っていることになるであらうか。

●私たちの国は、獄にいたる人を尋ねているであらうか。今日獄にいたる人を尋ねることは、隔週の火曜日に刑務所訪問をするチームを作ることの意味ではない。それは服役者の福祉に関心を持つことを意味しており、現在の刑務所制度が受刑者を立ち直らせることができるかどうかを問うことを意味している。ほとんどの刑法学者が一致していることは、少なくとも服役者の九〇パーセントは投獄されているべきではないし、出獄した服役者のほとんどは服役中に一層頑になつてしまつていくということである。刑務所制度を「機能」させ続けるために、カリフォルニア州は一受刑者につき年間約一万四千ドルを費やしている。「刑務所外」で一万四千ドルを用いると、犯罪者たちが商売をおぼえたり、教育を受けたり、仕事を見つたり、社会に貢献する一員となつたりする手助けをするために何ができるかを思うと私は考え込んでしまふ。

多数の服役者がマイノリティーの出身である。これは彼らに「犯罪的性格」があるからではな

い。彼らは、(a) 通常、極度に貧しい環境の出身であり、白人中産階級で当然と受けとめられている良い教育や有利な雇用の機会を剝奪されており、(b) ひとたび面倒なことに巻き込まれてしまうと専門家による法的救済を得る経済的余裕などなく、その結果(c) 最も厳しい判決を受けることになってしまっているからである。私たちの国には二つの法体系——一つは裕福な白人のため、もう一つはそれ以外の人のため——があるという主張は、裕福な白人には、そんなことは妄想がかった現実認識だという印象を与えるかも知れない。しかしそれ以外の人々には、身をもって経験していることを単に述べているに過ぎないのである。

私たちはもとのテキストから話をそらしてきているのではない。繰り返すが、私たちはテキストから遊離してはいない。私たちが提起した問題点はテキストからじかに出てくるものである。一度読むだけで、裁きの場に立たされているのが「国民」だということはすぐに分かることである。しかし少なくとももう二つの問いが残っている。

第一の問い。幻どおりの「正しい」国民——困っている人を助けるが、キリストのためにしていると感じていない人々——は存在するであろうか。

確かにそのような基準を本当に満たすような国はない。しかし他と比べてそれに近いいくつか

の国はある。「意外な知らせ」に直面する練習として、第三世界の友人たちから候補者を出してもらうことにしよう。その名前を聞くと多くの読者は驚くであろう。なぜならば、その国は私たちの政府が綿密に案を練った誹謗中傷キャンペーンの対象となっているからである。その国の名前はキューバである。キューバに対する最も厳しい批評家でも、少なくとも次の点に関しては、資格ありと認めるであろう。すなわちキューバは、自分たちがイエスに仕えていたとか、イエスの名によって仕えていたと告げられると驚いてしまう国であるという点である。なぜならば（少数のキリスト者を除けば）キューバ国民やキューバ政府は、自分たちの行為について宗教的理由を挙げるよりは、むしろ人道主義的、社会主義的、さらには共産主義的理由を挙げるだろうからである。

イエスの採点表に従って評価すると、キューバは私たちの国が支援しているラテン・アメリカのどの独裁政権よりもよくやっている。空腹の人やかわいている人のために十分な配給をする国家計画があつて、キューバ国民は贅沢な食べ方はしていないとしても、すべての人が十分に食べている。旅人に宿を貸すことも行なわれているが、第三世界諸国の人々だけに對してではない。合衆国の人間ですらも、自分たちが敵国政府の代表として區別されず、むしろ個々人として敬意をもって取り扱われたことを一様に報告している。裸の人に着せることも国家的決意のもとに行

なわれており、すべての人に仕事を与えたり、新しい住宅が建てられるまでは、さしあたって夜露を凌げる場所を分かち合ったりすることが行なわれている。病氣の人の面倒を見ようとする強い国家的決意もある。無償診療所、薬局、病院、医学校が島の全域に設けられている。刑務所に關しては、記録はさほど良くない。なぜならばキューバには今なお「政治犯」が獄中にいるからである。しかし政治犯の取扱いは私たちの政府が支援しているほとんどのラテン・アメリカ諸国とは比較にならないほど良い。

このことは、キューバが神の国の輝ける前触れであるとか、批判や修正の必要がないということとを意味してはいない。それはただ、もし私たちがイエスの幻を真剣に受けとめるならば、以上のようないくつかの驚きに出会うことになるというだけのことである。

第二の問い。あの「やぎたち」についてはどうなるであろうか。書かれていることに従うと、第二の範疇に属することになる国々（私たちの国も入っているのであるか？）、すなわち空腹の人やかわいている人に何も与えず、旅人に宿を貸さず、裸の人に着せず、病氣の人を見舞わず、獄にいる人を見舞わなかったすべての国々はどうなるのであろうか。

少なくとも、そんな国が一つしかないということはないであろう。「やぎ」と記された入口には大勢が集められるであろう。幻が緊急性を帯びているのは、そのことがまだ起こってはおらず、

新しい方向転換をする時間は今なお残されている、それゆえに実際の最終的評価はイエスが描いているものとは違ったものになりうる、ということをお私たちに気づかせるためであろう。

私たちの進むべき将来の方向を指し示す一つの信号機が立っている。

その場所は——一九六六年、世界教会協議会の「現代の技術革命、社会革命の中におけるキリスト者」という会議である。

その意義は——第三世界のキリスト者が世界の富の不公平な配分に挑戦して発言し、そして決議した最初の会議であったということである。

その講演者は——以上のような諸問題に関して並外れた感性を持った経済学者バーバラ・ウオードであった。

彼女の主張は——

「ただキリスト者だけが富裕諸国全体にまたがっています。それゆえに、キリスト者は圧力団体、しかも計り知れない重要性を持った圧力団体たり得るのです。……しかし、もし私たちがそうならず、最終的に天の父の前に出て、彼が『あなたがたは彼らに食べさせ、飲ませ、着物を着せ、宿を貸したか』と尋ね、そして私たちが『主よ、申し訳

ありません。しかし、私たちは国民総生産の〇・三パーセントを与えました』と答える
ようであったとしたら、それでは十分でないと思うのです」という訴えであった
(*Report, World Conference on Church and Society, Geneva, July 12-26, 1966, p. 19 ;*
Geneva, 1967)°